

イタリア地域研究のための基本文献

〈事典類〉

イタリア文化事典編集委員会編『[イタリア文化事典](#)』丸善出版、2011年

歴史、文化、芸術、政治、社会など多面的なイタリアを独創的な見出しで語る、読み物としても楽しい事典。

馬場康雄・岡沢憲芙編『[イタリアの政治](#)』『[イタリアの経済](#)』『[イタリアの社会](#)』早稲田大学出版部、1999年

わかりにくい政治や司法の体系、ローマ教会と国家の関係、経済と産業、女性や家族、移民などの社会問題を専門家が解説しており、イタリアの国家と社会を構造的に理解するために不可欠の知識が盛り込まれている。やや情報が古くなっているため、利用には各自アップデートが必要。新版が望まれる。

〈通史〉

北原敦編『[イタリア史](#)』（新篇世界各国史 15）山川出版社、2008年

古代から現代までを概観した基本書だが、さまざまな都市と国家、権力が併存したイタリア半島の統一的な歴史を書きうるのか、という一国史の根本的な問いを踏まえた記述になっており、その多様性を意識しながら読みたい。

北村暁夫・伊藤武編『[近代イタリアの歴史 16世紀から現代まで](#)』ミネルヴァ書房、2012年

イタリア統一以後の政治史に重点をおいて記述された最新の通史。各章が概説＋詳細な個別テーマという構成になっており、時代の概観からより詳細な論点へと分け入ることのできる仕立てになっている。見たことのない歴史的イタリアを知る好適書。

シモーナ・コラリーツィ（村上信一郎監訳、橋本勝雄訳）『[イタリア 20世紀史 熱狂と恐怖と希望の100年](#)』名古屋大学出版会、2010年

ファシズムをのぞけば日本ではあまり論じられることのないイタリアの20世紀の政治史。とくに60年代末以降の社会と政治の激動を独自の視点から読ませる大著。

〈専門書・歴史〉

ピーター・バーク（森田義之・柴野均訳）『[新版 イタリア・ルネサンスの文化と社会](#)』岩波書店、2000年

1980年代から90年代にかけて歴史学の領域で発展した文化史の、中心的な担い手のひとりであるイギリスの碩学の手になるルネサンス史。ルネサンス期の書物や美術品、歌舞演劇——想像的なもの——を、それが生産され消費される社会と政治の諸制度と

ともに描く。ルネサンス研究の基本書のひとつであり、イタリア地域研究を志すひとにとって基礎的な知識を提供してくれる。

北村暁夫・小谷眞男編『[イタリア国民国家の形成 自由主義期の国家と社会](#)』日本経済評論社、2010年

「イタリアはなった。これからイタリアをつくらねばならない」というモットーで知られるように、近代イタリアは国民なき国家として誕生した。さまざまな回路を通じての国民形成の試みは、同時に、「国民とはなにか？」の問いをつねにはらむ。近代イタリアの事例を読みながら、自分自身の「国民」意識を問い直してほしい。

ノルベルト・ボッピオ (馬場康雄・押場靖志訳、上村忠男解説)『[イタリア・イデオロギ](#)
[ー](#)』未来社、1993年

ネグリやアガンベンといったイタリア現代思想家たちの著作は、岡田温司氏らの精力的な仕事によって、多くを日本語で読むことができるようになった。本書は、そうした現代思想に接近するための前提となるイタリア思想史を、大家ノルベルト・ボッピオが考察する(彼自身、知識人としてイタリア社会と格闘する思想家であった)。包括的思想史としても、現代思想家たちがなにと闘っているのかを知るためにも、一読をすすめる。

ファシズム研究会編『[戦士の革命・生産者の国家](#)』太陽出版、1985年

イタリア・ファシズム研究は、おそらく日本におけるイタリア研究の出発点であり、日本社会の歴史への問いも含めて、膨大な蓄積のある分野である。そのなかで一冊を挙げるのは非常に難しいが、本書は基本的な事項やデータを備えながら、同時に論点も提示しているという点で、ファシズム研究をはじめのひとにとっての基本書である。本書を踏まえて、今日のファシズム研究の到達点を考えるという意味でも重要。

北原敦『[イタリア現代史研究](#)』岩波書店、2002年

近年の日本のイタリア史研究を牽引してきた歴史学者の、ファシズムとレジスタンスをテーマとした論文集。緻密な議論が特徴的な収録論文は主に70年代に書かれたものだが、イタリアの近現代史研究の歴史的变化と動向を史学史的な観点から整理した巻末の付論「イタリアにおける近現代史研究の過去と現在」(2001年)と合わせて、地域研究としての歴史学が、研究者自身のおかれた時代や社会のなかで産出されるという当たり前の、しかし忘れがちなことに気づかせてくれる。

岡田温司『[アガンベン読解](#)』平凡社、2011年

同じ著者には思想・芸術論など多岐にわたる優れた著書が多数あるので、自分の興味に従ってさまざまな角度からイタリアを知ることができる。アガンベン、ルネッサンス、ジョルジョ・モランディなど、何から読み始めるかは読者の自由である。

カルロ・フェルトリネッリ『[フェルトリネッリ イタリアの革命的出版社](#)』、麻生九美訳、晶文社、2011年

父祖の莫大な財産を戦後まもなく継承した若き共産党員ジャンジャコモ・フェルトリネッリは、社会主義や労働関係の著作を自らの戦略をもって集め図書館を創設する。やがて出版社を立ち上げた彼は、パステルナーク、ケルアック、チェゲバラをはじめとする「革命的」な作家をイタリアに紹介しつつ斬新な出版活動を展開していく。その後1972年の謎の死へと集約される彼の生を、息子カルロ・フェルトリネッリが辿る。

ジャン・ピエロ・ブルネッタ『[イタリア映画史入門 1905-2003](#)』、川本英明訳、鳥影社、2008年

イタリア映画の批評家ジャン・ピエロ・ブルネッタが数冊にわたって描き出したイタリア映画史のパノラマが1冊の本のかたちで翻訳された。映画史におけるイタリアの重要性は周知のこととはいえ、詳細についてあまり知られていないこともたくさんある。日本語になったおかげで、最初の一歩が踏み出しやすくなった。

田之倉稔『[イタリアのアヴァンギャルド 未来派からピランデルロへ](#)』(新装復版)、白水社、2001年

★図書館では [初版\(白水社、1981年刊行\)](#) を所蔵

蔵

もともと [1981年に出た書籍](#) を20年を経て2001年に新装復刊したもので、未来派に関する基本的な知識から「機械と舞踊」、ルイジ・ピランデッロからファシズムまでがわかりやすく紹介されている。未来派についての取り掛かりとして一読をお勧めする。

〈専門書・文学・批評〉

イタロ・カルヴィーノ『[なぜ古典を読むのか](#)』、須賀敦子訳、みすず書房、1997年初版
イタリア現代文学の鬼才カルヴィーノが文学作品について世界中の古典を語る。イタリアはガッダ、モンターレ、パヴェーゼがここでは選ばれている。イタリア文学学習者にとっての古典の一冊。

イタロ・カルヴィーノ『[水に流して](#)』(カルヴィーノ文学・社会評論集)、和田忠彦、大辻康子、橋本勝雄共訳、朝日出版社、2000年

カルヴィーノが文学とそれを超える場において広い視点で批評を繰り広げる。インタビュー形式あり作家への書簡形式あり、日本語で約400ページの大著だが、これを読むと文学を中心としたイタリアの芸術表象のさまざまなテーマの敷居に少なくとも足をかけた気になれる。

L'occhio della Medusa –fotografia e letteratura-, Remo Ceserani, Bollati Boringhieri, 2011

(レーモ・チェゼラーニ『メドゥーサの眼—写真と文学』)

世界が誇るイタリア文芸批評家レーモ・チェゼラーニによると、1838年のダゲレオタイプ写真の登場は、リアリティの知覚・表象の仕方自体において革新的な技術を生み出したことにとどまらないという。チェゼラーニは本書において、写真と文学作品を比較し幅広く精査することでボードレー、カルヴィーノ、フォークナー、プルースト、タブッキらの語りの戦略や理論的方向付けを類稀な手腕でまとめあげる。

Raccontare il postmoderno, Remo Ceserani, Bollati Boringhieri, 1997 (レーモ・チェゼラーニ『ポストモダンを語る』)

イタリアではかなり早い時期において、建築から社会学、文芸批評から哲学、小説から絵画へと、技術および芸術のあらゆる知の場で習慣を位置づけながら「ポストモダン」が論じられてきた。それが様式、時代、歴史、視覚による潜在性を自在に組み合わせた、民主的な意味で解放をもたらすほどの楽しい過程であったことを、チェゼラーニは語る。この著者には他にも「幻想文学」など基本的な文学用語を世界中の例を引きながら解説するすぐれた高度な入門書が多々ある。

〈専門書・文学・作品〉

ルイジ・ピランデッロ『ピランデッロ短編集 カオス・シチリア物語』白崎・尾河訳、白水社、2012年

ピランデッロは多くの短編を書いているが、そのなかからタヴィアーニ兄弟のオムニバス映画『カオス・シチリア物語』のもとになった短編を選びすぐって紹介している。シチリアを知るために一読をお勧めする。

デ・ロベルト他『短編で読むシチリア』武谷なおみ編訳、みすず書房、2011年

レオナルド・シャーシャをはじめとするシチリア研究の第一人者による短編選集。ひとつひとつの短編をすべて読み終えたあとにはシチリアの鮮やかな姿が浮かび上がる。

(2014年1月 小田原琳・越前貴美子)